

フリースクール・オープン教育から学ぶ
だれもが通える学校とは

1730041594

経営学部 公共経営学科

4年20組24番

近藤 玲子

目次

要旨 p 2

第一章 問題の所在 (p 4)

第二章 学校の今 (p 5)

第一節 学校全体の今

- (1) 学級崩壊
- (2) いじめ
- (3) 不登校・登校拒否

第二節 公立校の今

- (1) 学力格差
- (2) 教師の力量不足
- (3) 保護者との衝突
- (4) 自治体間の教育予算格差

第三章 フリースクールから学ぶ教育プログラム (p 10)

第一節 フリースクール誕生の背景

第二節 フリースクールの活動と教育プログラム

- (1) 教育理念
- (2) 東京シューレでの教育プログラム

第三節 フリースクールから公立校に活かせる要素

第四章 オープン教育から学ぶ教育プログラム (p 14)

第一節 オープン教育とは

第二節 オープン教育の活動と教育プログラム

- (1) 愛知県東浦町立緒川小学校における教育プログラム
- (2) 東京都杉並区立和田中学校における教育プログラム

第三節 他の公立校へ活かせる要素

- (1) 学習速度・到達度・興味関心、に応じた授業
- (2) 個別指導、TTによるサポートの徹底
- (3) 地域住民・ボランティア・保護者の協力
- (4) 自治体の理解と協力

第五章 誰もが通える学校のかたちとは (p24)

第一節 個を育てる教育プログラム

- (1) 子どもの個性を認めた教育
- (2) 子どもの理解度に合わせた教育
- (3) 興味関心を伸ばし、思考することを植え付ける教育

第二節 開かれた学校

- (1) 地域住民・ボランティアとの協力
- (2) 保護者との協力
- (3) 自治体との協力

終章 (p27)

参考・引用文献

要旨

第一章 問題の所在

不登校やひきこもり、いじめ、学級崩壊など学校は様々な問題を抱えている。大切な時期を過ごす学校が、安心して居心地の良い場でなくなっている。そこで、誰もが楽しく通える学校とは一体、どのような形なのであろうか。この問題に対し、フリースクールとオープン教育に注目し、誰もが通える学校のかたちを追究していく。なお、本論文では全ての子どもが通うことができる公立校に限定して展開していく。

第二章 学校の今

私立校、公立校問わず、全ての学校で抱えている問題が、学級崩壊、いじめ、不登校・登校拒否、である。次に公立校で抱える問題として挙げられるのが、学力格差、教師の力量不足、保護者との衝突、自治体間の教育予算格差、である。本章ではその原因や影響について触れる。

第三章 フリースクールから学ぶ教育プログラム

フリースクールは子どもを主体に考え、興味関心が広がるような教育プログラムを持つ。フリースクールの草分け的存在である東京シューレの活動を例に挙げ、公立校へ活かせる要素を考える。

第四章 オープン教育から学ぶ教育プログラム

生徒が興味ある分野を自分で発見し、調べ、学んでいくという子どもの人間性重視の教育方針をオープン教育という。実際にオープン教育を実施している愛知県東浦町立緒川小学校と東京都杉並区立和田中学校の活動を例に挙げ、全ての公立校へ活かせる要素を考える。

第五章 誰もが通える学校のかたちとは

フリースクールとオープン教育から取り上げた要素をもとに考える誰もが通える学校のかたちとは、個を育てる教育プログラムを導入し、地域・ボランティアが活発な開かれた学校である。

終章

教育はすべての子どもに与えられるべきものである。しかし、現在、学校では様々な問題を抱え、受けられるべき教育を受けることができずにいる子どもがいる。そのために、現在ある学校の多くは変革を必要とする。

第一章 問題の所在

最近のニュースで話題に上がるトップ3といえば「政治と金」「年金問題」そして「教育」である。「教育」がメディアで取り上げられるときは、学級崩壊・いじめ・不登校・ひきこもりなど学校と生徒の問題を伝えるものや、教師へ無理難題を求めるモンスターペアレンツとよばれる親と教師・学校の問題、また「脱ゆとり」のような国による教育行政の変化、について取り上げることが多い。特に最近ではいじめを苦に自殺する事件が多く起こっており、「学校」が子どもたちにとって居心地の良い、安全な場所とすることができなくなってきた。

小学校、中学校と義務教育期間があり、義務教育を終えた後でも高校進学率は97%を超えており¹、現在の日本では「学校」という場で過ごす時間はとても長い。それゆえ、子どもが肉体的・精神的に急激に変化し、成長する大切な時期に、安心して学べる環境になるというのはとても重大な問題である。

大切な時期を過ごす学校は、全ての子どもにとって、安心して居心地の良い場でなくてはならないし、学校に通うことが苦になってはならない。不登校やひきこもり、いじめが無く、誰もが楽しく通える学校とは一体、どのような形なのであろうか、という疑問が生じた。

そこで、この疑問を解くために、フリースクール²とオープン教育³に注目した。ひきこもり、不登校などの生徒が多く通うフリースクールを取り上げることで、問題を抱えた生徒にどのような教育プログラムを施すのかを参考にし、公立の学校への適応を考えていく。また、オープン教育が行われている学校を取り上げ、生徒の様子、成果に着目していくことによって、全ての子どもが通える学校のかたちを追究していく。

誰もが通える学校のかたちというテーマにおける「学校」は公立校に限定した。私学であると保護者の所得や学力という条件が必要になり、すべての子どもが無条件に通えることができないためである。

¹ 平成19年度の高校進学率は97.7%、通信制課程を除くと96.4%。昭和49年の高校進学率は90%を超えた。

² 学校に行っていない小中学校の年齢の子どもを対象に、学校教育の枠にとらわれない教育活動を行っている民間の教育機関の総称。
馬場章『行ってみないかこんな「学校」』ハート出版、2000年、p.48

³ イギリスで始まり、アメリカでも幼稚園からハイスクールまで、さかんに行われている人間性重視の教育方針のこと。

第二章 学校の今

現在の学校では様々な問題が起こっている。本章では、私立、公立問わず、学校はどのような状況に置かれているのかについて述べていく。さらに、公立校ならではの問題について触れる。

第一節 学校全体の今

公立校・私立校ともに、小中高等学校では、学級崩壊、いじめ、不登校・登校拒否、など様々な問題を抱えている。

(1) 学級崩壊

文部科学省が調査研究を委嘱した国立教育研究所は、学級崩壊について小学校102学級の分析調査の結果、全体の7割の学級が当てはまった。

学級崩壊は、学級生活の全面的崩壊、授業の不成立といった事態をもたらしている。特徴としては、教室を立ち歩いておしゃべりをし、奇声を上げ、教師が注意しても、無視するなど反抗し、授業を妨害する。また、ちょっとしたことでパニック状態に陥り机や椅子、壁などを蹴って壊す生徒もいる。必ずしも、教師の学級経営能力にかかわらず、高学年の担任を何度も経験したことのあるベテラン教師やかつて学級経営に優れた業績をあげた教師の学級でも起きる点が注目される⁴。

(2) いじめ

次にいじめについてだが、いじめの定義は必ずしも一定しない⁵。文部科学省の調査では、

- ① 自分より弱い者に対して一方的に加えるもの
- ② 身体的・心理的な攻撃を継続的に加えるもの

⁴ 真中行造「学級崩壊」『つくる会』 <http://www8.ocn.ne.jp/~senden97/index.html>

⁵ 警視庁では、単独又は複数の特定人に対し、身体に対する物理的攻撃又は言動による脅し、いやがらせ、無視等の心理的圧迫を反復継続して加えることにより、苦痛を与えること、としている。

③ 相手が深刻な苦痛を感じているもの

と定義している⁶。「いじめ」の報告数は年々増加する傾向にあり、全ての公立校のうち20.3%の学校でいじめが報告されている⁷。いじめられた経験のあるものは、小学生22%、中学生13%、高校生4%であり、いじめた経験のあるものは小学生26%、中学生20%、高校生6%となっている。また学年別の発生率では中学1、2年が特に多かった⁸。いじめの内容には悪口やからかい、仲間はずれ、暴力、用事を言いつける、言い掛かり・脅しなどが主立っている。さらには、教師からからかいを受けて、いじめに発展するケースもある。2006年に福岡県の中学校2年生の男子生徒が自宅倉庫で首を吊って自殺するという事件が起こった。ズボンのポケットなどに複数のメモがあり、「いじめられて、もう生きていけない」「いじめが原因です。さようなら」などと記していた。その後の調べで、いじめは元担任の”からかい”から始まったものとされている。

(3) 不登校・登校拒否

不登校・登校拒否については、文部科学省の調査⁹によると、2006年度の「不登校」を理由とする長期欠席者数（年間30日以上）は12万6764人（前年度比4477人増）だった。不登校者数は1975年以来27年間増加し、その後、4年間微減を続けていたが増加に転じた。全児童に占める割合は1・17%で、少子化の影響もあり、中学生に占める割合は2・86%と過去最高を記録した。不登校をしたきっかけは、多い順に「本人の問題に起因」37・6%、「学校生活に起因」35・5%、「家庭生活に起因」18・5%となっていた。不登校が継続している理由として、もっとも多かったのが「不安など情緒的混乱」31・7%、次いで「無気力」24・8%、もっとも少なかったのが「教職員との関係」0・9%だった。今回、きっかけ、継続理由に「いじめ」の項目が新設され、いじめを不登校のきっかけに選んだのは3・2%、継続理由は1%だった¹⁰。不登校・登校拒否生徒が増加してしまった理由として、「対応が十分ではなかった」「家庭の教育力の低下」「人間関係を不得手とするものの増加」などを挙げている。

6 いじめが起こった場所は学校の内外を問わない、としている。

文部科学省HP <http://www.mext.go.jp/>

7 平成15年の文部科学省の調査では、小学校では11.9%、中学校で38%、高等学校で26.6%、養護学校で4.8%の学校からいじめが報告されている。

8 文部省初等中等教育局、児童生徒のいじめ等に関するアンケート調査結果

9 学校基本調査、児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査、児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査

10 『Fonte.』(旧『不登校新聞』)2007年8月10日

<http://www.futoko.org/top/news/070810.html>

このほかにも、教師に無理難題を求めるモンスターペアレンツなども挙げられ、学校と保護者の問題も多い。例えば、「自分の子供がリレー競技の選手に選ばれないのは不自然だ」とクレームをつけたり、自分の子供が注意されたことに逆上して職員室に乗り込んでいたり、常識はずれの親もいる。こういった保護者対策など教師の仕事量が膨大となっている現状も見逃すことができない。教材研究、生徒指導、校務、委員会、部活、などその仕事量は膨大で、休み時間など皆無に等しい。教師の平均残業時間は2時間で、毎日7～8時に職場を出る¹¹。休日にも部活動の指導や学校説明会、研究会、講演会などで出勤することが多く、有給休暇を取ることもなかなかできない。生徒一人ひとりに目を配り、手をかけるべきだが、実際は担任する学級を運営するだけで手一杯なのである。

第二節 公立校の今

(1) 学力格差

まず、私立校に比べ、生徒の学力に大きな差があることが挙げられる。私学では入学試験によって、ある程度同じ学力を持つ生徒で集められているが、公立校の場合、偏差値30～75まで幅広い学力の生徒が在籍する。そのため授業では、理解の格差が大きく生じ、理解度の速い生徒は授業を持て余し、逆に遅い生徒は授業についていくことができない。「授業が理解できない、つまらない」と感じる生徒にとって、この時間は苦痛であろう。筆者自身、公立中学校では全く授業についていけず、毎時間、教師に指名されないように祈っていた記憶がある。教師の側からすると、生徒指導や部活動、校務などに忙殺され、生徒一人ひとりをフォローすることができず、躓いた生徒を拾い上げるのは学習塾任せになってしまっている。

(2) 教師の力量不足

次に、教育者というよりも、身分が安定し、決まった給料を安定してもらえる「公務員」という認識を持っている教師が多く存在しており、教師の力量が不足していることも問題となっている。教師間の温度差も激しく、ある公立高校の男性教師は自主的に大学に通い、教育問題の研究を続けているが、しばしば同僚の冷ややかな目を感じるという。仕事には差し支えないように研究し、校務も積極的に行うも、職員会議で何か提案すると内容を問

¹¹ 「教師の1日辺り平均残業時間は2時間」『教育家庭新聞』 2007年4月18日
http://www.kknews.co.jp/wb/archives/2007/04/1_2.html

わず反対され、「先生は研究者だからね」と露骨な嫌味を言われたこともあるという¹²。ベネッセコーポレーションは小中学校の教師と塾講師の「子どもの信頼、教え方の評価、人気」の3要素について調査を行っており、結果を見てみるとすべての項目において塾の講師が上回っている¹³。塾教師にとっては、この3要素は通塾する子どもの人数の増減、つまり塾の盛衰に直接関係し、生活権に結びつく。私立校の教師も同様に、自身の力量が不足し、満足な授業・生徒対応ができない場合は、解雇される。しかし、公立校の教師にとって、生活への恐怖とは直接無関係であり、その安心から怠慢を生み出している。

(3) 保護者との衝突

私立校に比べ、学校の方針に合わず、クレームをいう保護者が多い。私立校ではその学校の教育方針をよく知った上で子どもを通わせるため、学校の方針に理解があるが、公立校の場合は教育方針など知らずに、当たり前のように子どもを通わせるので、教師・学校と保護者の意見が衝突するケースがある。近年では、教師・学校が保護者に訴えられることもあり、都の公立校では教師用の「訴訟保険」の加入率が3割強となっている。以前では、親は教師を信頼して我が子を預けていたのだが、親の大学進学率が高まり、高学歴化するにつれ、親が教師を下に見る傾向が強くなった。また、教育に介入する親が多くなり、「お受験」によって殺人事件にまで発展するケースもある¹⁴。

(4) 自治体間の教育予算格差

公立校の間でも、自治体によって教育予算格差がある。校舎の建て替えなども、財政状況によって予算を確保できないため古い校舎で授業を続ける自治体が多くある。また、近年ではコンピューターを使う授業を取り入れる学校が多い中、教育予算の少ない北海道では授業用コンピューターが1台も無い学校もある。教育環境に格差があれば、それは直接教育の質の格差に繋がる。義務教育期に充実したコンピューター教育が受けられる生徒と全く受けられない生徒では、その後の進学や就職に大きな差異が生じる¹⁵。

¹²日経新聞 1998年10月23日

<http://www.senior-rrilic.net/homepage1stversion/no.4life/no.4-4fmly/fmly009.html>

¹³ ベネッセコーポレーションの小中学生調査。小学生1600人、中学生1700人、平成6年、平成7年

¹⁴ 1999年11月22日に東京都文京区の少女が行方不明になり、同じ保育園に子どもを通わせていた女が逮捕された。殺人の動機は有名幼稚園の受験を巡って、親同士の心の衝突があったからためとしている。

¹⁵ 明田直哉・大田真理子・昆卓也『現代教育改革の在り方～現状とこれから～』
<http://gyosei.mine.utsunomiya-u.ac.jp/070702ensyukyoiku.htm>

学級崩壊、いじめ、登校拒否、などの問題の他に、公立校は独自の問題を抱えており、生徒が必ずしも安心できる、居心地のよい場所ということができなくなっている。

第三章 フリースクールから学ぶ教育プログラム

本章ではフリースクールの理念や実際の教育プログラムを取り上げ、その利点において公立校へ適応できる要素を考えていく。

第一節 フリースクール誕生の背景

フリースクールとは、学校に行っていない小中学校の年齢の子どもを対象に、学校教育の枠にとらわれない教育活動を行っている民間の教育機関の総称である。『世界教育辞典』によると、

- ①アメリカの無償小学校
- ②アメリカのフリースクール協会傘下の人道主義に基づく貧民のための無償の学校
- ③児童の自由を尊重するイギリスのサマーヒルスクール¹⁶のような自由学校
- ④オープン・エデュケーションの行われているイギリス、アメリカの学校
- ⑤オルタナティブ・スクール¹⁷

と以上のように分類される。

日本ではフリースクールはいじめを受けたもの、ひきこもり・登校拒否の子どもが通うという認識が強く、実際そういった子どもを受け入れている所が多い。

フリースクールが登場した背景には、まず、いじめや学級崩壊の増加が挙げられる。いじめに遭い、居場所を失くした子どもや、学級が崩壊してしまい、心地のよい空間がない子どもへ居心地のよい居場所を提供するためフリースクールは誕生した。

また、学校・社会全体の学力偏重もその背景として挙げられる。子どもの価値を「学力」によって測り、勉学の出来、不出来によって順位を付けた。勉強のできない子どもの中には、「落ちこぼれ」とレッテルを貼られ、いじめの対象になったり、周囲からの強いプレッシャーを受けたりして、学校へ行くことができなくなってしまった者もいる。また、「落ち

¹⁶ 「大人の価値観に子どもが合わせようとするのではなく、子どもがありのままでいられ、好きなことを思う存分できる場」という理念に基づいて設立されたスクール。授業には興味のあるものだけ参加し、参加しない場合、他のことを自由に行うことができるという特徴を持つ。

¹⁷ 学校に戻すことより、子どもたちの自分の居場所を提供し、子どもが、自分から学校に行きたいと思わせる教育。

こぼれ」というレッテルを張られないよう、必死で塾に通い、思考することよりも暗記重視の点の取れるものばかりを第一に考え、個性がなく、自ら思考し行動することが苦手な子どもが多くなってしまった。灰谷健次郎の『天の瞳』という本の中で、不登校で中学校に通わない少女が登場する。少女が友達に宛てた手紙の中に不登校の理由をこのように書いている¹⁸。

…ものを考える時間なんて、ぜんぜんないじゃない。学校では決められた時間に、決められたことをやらされ、家へ帰るのは夕方でしょう。すぐに宿題をやらなくちゃならないし、自分の時間が全然ない。…中略…勉強以外のもっと大切なことを、自分が納得いくまで、とことん考える時間が、わたしはほしいの。なにかに疑問を持つ時間もない暮らしなんか絶対いや…

学校の勉強に追われて思考することができず、個性を失くす事が怖い、と考える少女は実在の人物である。馬場章氏も著書の中で、「学校が知的興味をかきたてるものから、多様な知的関心を抑えつけるもの、自分たちの個性や能力の伸長を抑圧するものとさえ感じられるようになったと」、述べている¹⁹。この少女のように学力偏重の社会から「はみだした」子どもを受け入れる場としてフリースクールが必要とされた。第二節で述べるように、フリースクールでは、生徒自身が興味あるものに取り組み、疑問を追及していくカリキュラムを採っており、子どもの個性を非常に大切にしている。

第二節 フリースクールの活動と教育プログラム

本節では、フリースクールの教育理念や教育プログラムについて触れる。

(1) 教育理念

現在、フリースクールは数多くあるが、多くの理念や授業プログラムにおいて共通点を持っていることが分かった²⁰。

① 主体は子どもにあり、子どもの個性を尊重する

¹⁸ 灰谷健次郎『天の瞳 成長編Ⅱ』角川出版、2001年、pp 271 - 272

¹⁹ 馬場章、前掲書、p 31

²⁰ 法人楠の木学園、法人ヒューマン・ハーバー、フリースクール・ぱいでいあ、フリースクール僕んち、人の泉・オープンスペース、相模湖フリースクール、スペース海、において教育理念や活動プログラムを比較した。

- ② 子どもが安心していられる場所を与える
- ③ 子どもの興味・関心を大切にし、無理やり勉強をさせるようなことはしない
- ④ 子どもの関心が広がるよう、音楽や遊びなど勉強以外のカリキュラムがある

フリースクールは、子どもの個性というものを尊重し、子ども一人一人が自由に学べるような環境作りをしていることが分かる。数学や国語などを勉強することだけが‘学び’ではない。むしろ、子ども自身が何に興味関心があるのかを知り、自己理解を深め、発見していく過程にこそ多く‘学び’があり、自ら学び取ったものは大人になっても忘れることないだろう。ルソーは「人間よ、人間的であれ」といい、不確実な未来のためにあらゆる束縛を受け、苦しい勉強をし、楽しさを知らずに育った子どもを知恵の犠牲者として哀れんでいる²¹。企業に採用されるための‘人材’を育成するのではなく、‘人間’を育てることが教育である。大人による押し付けや強制ではなく、子どもは自ら学び、自ら選び、自らを形成していく。フリースクールの理念にはそのような‘人間的’な点が強く感じられる。

(2) 東京シューレでの教育プログラム

具体的なプログラムについて「東京シューレ」を例に挙げて述べていく。東京シューレは日本で最初のフリースクールであり、現在あるフリースクールの基礎を作った草分け的存在であるため、東京シューレを選択した。

東京シューレは1985年に設立し、「自治・自由・個の尊重」を大きな柱としている。シューレには校則はなく、好きな髪型や服装で登校してくる。もちろんルールは存在するが、子どものニーズに合わせて新しく作ったり、変えたり、無くしたりすることができる。そのような話し合いは週一回のミーティングで、子どもが主体となっていられ、大人が勝手に決めるということはない。やりたい講座やイベントがあるときは、実行委員会が組織され、子どもは自由に参加することができる。

授業では、国語、数学、科学、社会、英語など学校にあるような分野は一通りあるが、学校の授業とは異なり、授業や講座を担当する講師やスタッフと、どんなことを、どうやっていくのかを決めていく。また、音楽、ダンス、美術の授業、鉄道やサッカーなどのサークル活動、「シリーズ人間」という講座ではマンガの原作者やテレビゲームの設計者など、第一線で活躍している人を招くこともあり、勉学にとどまらず、生徒が興味・関心を持てるようなプログラムが様々ある。これからの参加は自由で、最初、参加していなかった子

²¹ ルソー『エミール（上）』岩波書店、1962年、p 101

どもも、いつの間にか積極的に参加することもよくある。

スタッフは、20代から60代と幅広くいるが、30代のスタッフが多く、経歴も、大学卒・大学院卒もいれば、ボランティアからスタッフになった人、元不登校で東京シューレの会員として育ち大人になってからスタッフをしている人、親の会からシューレを手伝うようになった人、教師や別の仕事をしていてスタッフになった人など様々だ。シューレのスタッフは「先生」ではなく、子ども一人ひとりをサポートしていく存在であり、友だちのことや親のこと、恋愛のこと、進路のことなど、悩み相談を受けることが多く、とても近い距離で子どもと接している。また、保護者に向けても、不登校や家庭教育の重要性、子どもとの接し方などについて理解を深められるように、講演会を行っている²²。

第三節 フリースクールから公立校に活かせる要素

フリースクールに通う子どもの多くは学校でいじめを受けたり、授業が苦痛であったりと居場所を失い、登校拒否になった子どもが多い。こういった子どもたちがフリースクールでは生き生きした顔でいるのは、フリースクールが居心地の良さを与えてくれるからである。公立校においても、居心地の良い場所を提供するということは、子どもたちが楽しく学校に通える重要なポイントである。では、居心地の良さというのはどうすれば与えることができるのか。

それはほとんどのフリースクールの共通理念である、「主体は子ども」という考えと、「押し付け・強制はしない」という考えにあり、大人が主体になるのではなく、子ども自身が自分で考え、行動することで、生徒は興味・関心のあるものごとに自ら積極的に関わっていくことができる。興味があるものを学校で研究したり、活動したりすることで生徒は学校に通うのが楽しみになるのではないか。もちろん、大人は子どもに目を向け、助けが必要な時はいつでも手を貸せるような体制になってなければならない。そのためには、人材も必要であり、ボランティアや地域の協力、保護者の理解が必要となる。

また、授業も教科の勉強に留まらず、音楽やダンス、鉄道研究など子どもが興味を持つ講座を開講したり、様々な分野で活躍している大人と接したりすることによって、子どもの知っている世界を広げ、知的好奇心をかきたてることも生徒が充実した学校生活を送る要素となるのではないかと考える。

²²東京シューレHP <http://www.homeshure.jp/>

第四章 オープン教育から学ぶ教育プログラム

本章ではフリースクールとは異なり、「学校」という形をとりながらも、学校・教師が一方的に教えるのではなく、生徒が興味ある分野を自分で発見し、調べ、学んでいくという人間性重視の教育方針であるオープン教育を実践している学校を取り上げ、その利点において全ての公立校へ適応できる要素を考えていく。

第一節 オープン教育とは

オープン教育（オープン・エデュケーション）とは、今から数十年前にイギリスで始まり、アメリカでも幼稚園からハイスクールまで、さかんに行われている、主性・思考力・判断力・責任感・決断力・創造力・発言力などの人間性を重視する教育方針のことである。

これまでのような教師が一方的に授業を行い、生徒は決められたことをこなす教育では、子どもの個性や学習意欲、決断力、などが伸びにくい。灰谷の本に登場する少女が語るように、学校で指示されたことばかりやっていると、いつか物事を疑問に思う心が失われてしまう可能性もある。そのようなことがないように、人間性を重視するオープン教育は少しずつ浸透してきている²³。

また、いじめや登校拒否の生徒が増加していることも、日本でオープン教育が登場し、浸透してきている理由である。オープン教育を実践している学校では、生徒の能力に合わせて指導したり、生徒一人ひとりの研究に対して教師がサポートしたりするなど、日頃からコミュニケーションをとり、悩みを抱える生徒やいじめられている生徒がいないかをチェックしている。教室がなく、壁のないオープンスペースで授業を行っており、休み時間はクラスを越えて交流が生まれるなど、閉鎖的な空間を作らないようにしていじめを抑制している学校もある。

²³ 日本でオープン教育（オープン・エデュケーション）が登場したのは30年ほど前である。

第二節 オープン教育の活動と教育プログラム

では、具体的にどのようなカリキュラムがあり、どのように授業が行われているのか、について、愛知県東浦町立緒川小学校と東京都杉並区立和田中学校の取り組みを例に挙げ、述べていく。

(1) 愛知県東浦町立緒川小学校における教育プログラム²⁴

愛知県東浦町立緒川小学校は公立の小学校で、創立が明治5年と歴史のある学校である。児童数は一学年平均で80人、2～3学級あるのでクラス25人で教員数は33名。規模としてはごく普通の小学校である。この緒川小学校がオープン教育を始めたのは約30年前と日本のオープン教育の中では古く、長い期間かけてなされている。そのため、今回具体例として緒川小学校を取り上げた。

緒川小学校の教育目標は「豊かな心とたくましい体を持ち、主体的に判断し、行動ができる子どもを育成する」というものである。経営方針には以下のことを掲げている。

- ① 心の豊かさを育む教育活動を展開する
- ② 基礎的、基本的な学力の定着と個性・創造性の伸長を図る
- ③ 開かれた学校を目指し、家庭や地域社会と連携して学校経営を推進する

全職員の共通理解と協力体制のもとで、子どもたちの「生きる力」の育成を目指し、つねに実践内容の工夫と充実を図りながら、活力に満ちた教育活動を展開している。緒川小学校の全ての理念や目標に共通しているのは「子どもは一人ひとり、みんな違う」というもので、その子に合った教育を施そうという考えがある。

この緒川小学校で行われているオープン教育の実践例をまとめると以下のようなになる。

- ① 教室をなくし、オープンスペースで授業を行う
- ② ノーチャイム制、1日3ブロック制(45分×2+5=95分)
- ③ 学習速度、到達度、興味関心、に応じて授業を受けることができる
- ④ 個別指導、TT²⁵によるサポートの徹底

²⁴ 愛知県東浦町立緒川小学校 HP <http://www.medias.ne.jp/~hogashot/>

小笠原和彦『学校はパラダイス 愛知県・緒川小学校オープン教育の実践』現代書館、2000年

²⁵ Team Teaching の略。学級の指導に一人の教員が当たるのではなく、複数の教員がチームをつくり、児童生徒の指導に当たる授業形態。

⑤保護者・地域の協力によるサポート

である。

まずオープンスペースによる授業を行うことで閉塞感をなくした。子どもたちは壁のない空間から自由を感じ、精神的に軽くなる。閉鎖的な空間を排除することで、いじめを抑制する効果もある。また、空間が広いので個別指導がしやすいというメリットがある。次にノーチャイム制はチャイムが一日中鳴らず、学習途中の子どもの思考を中断させないため導入されている。また、時間の管理を自ら行い生活するという自主的な態度を育成している。1日3ブロック制は個別指導を多く行っているため、子どもが納得いくまで追求できる時間を確保するためである。

学習速度、到達度、興味関心、に応じて授業を受けることができるという点について、緒川小学校では様々な取り組みがなされている。例えば、「はげみ学習」という時間は、指導の個別化を図る学習時間として位置づけられ、学習速度や到達度の違いをカバーすることができる。「オープンタイム」の時間では、子どもの興味・関心に従い、子どもが自分で立案した学習作業を展開する時間だ。この時間の対応は教師だけでなく地域の方のボランティアも参加している。

個別指導、T Tによるサポートの徹底では、一斉授業では学習速度の遅い、速いが生じ、落ちこぼれの生徒を生み出す要因となっているが、緒川小学校では個別の対応で理解度を高めている。またT Tも学年の教師協業による学年T Tや全教師による全校T T、など様々な形態のT Tを実践している。

また、学習の必要性に応じ、地域在住の専門家や学区外の専門家に参加してもらうなど、地域との交流もある。P T Aもユニークで、1年生の保護者は子どもたちが行っている学習から給食までを体験し、個別化・個性化教育がどのようなものかを保護者に知ってもらう。2年目は、保護体育部に入り、スポーツ祭に参加したり、夏休みのプールの監視にあたりたりする。3年目は交通安全などの校外生活部になり、4年目は花壇の整備やトイレ掃除を行う環境整備部に入る。5年目には学習材整備部になり、オープンタイムを支援してくれるボランティアの募集や特設講座を開設するなど、学習に関することをサポートする。そして6年目は小学校の取り組みを伝える広報文化部へ入る。普通のP T Aとは異なり、子どもの目線から始まり、最後は学習をサポートし伝えていく役割を担っている。P T Aの活発さとボランティアの多さから緒川小学校は地域に開かれた学校となっている。

このように、緒川小学校は30年の長い間オープン教育を行ってきた知る人ぞ知る学校であり、登校拒否の生徒をもつ親がわざわざ東浦町まで引っ越してきてまで入学させるほどである²⁶。緒川小学校では「子どもは一人ひとり、みんな違う」という認識の下、学校・

²⁶小笠原和彦、前掲書、p5

地域・保護者の連携によって、学力だけでなく、創造性・感受性・自主性・自発性・決断力など子どもの能力を引き出し、伸ばす教育を行っている。

(2) 東京都杉並区立和田中学校における教育プログラム²⁷

杉並区立和田中学校という公立中学校では「よのなか」科という総合学習の時間がある。「よのなか」科とは、学校で習っている「知識」を、世の中で通用する「知恵」と「技術」に変換する、という目的のもと、和田中学校の藤原和博校長が始めた授業である。一学年がひとつの教室に集まり、藤原校長自身が授業を行う。子どもたちは授業テーマに基づいてグループで議論するが、このグループには「よのなか」科を見学に来た大人も混ざって活動する。

筆者は2007年12月19日(水)に、和田中学校の「よのなか」科を見学してきた。そのときの授業の様子と生徒の活動を報告する。

■■ 2007年12月19日(水) 2限～3限 杉並区立和田中学校にて ■■

テーマ：「ホームレス問題を考える」

生徒：中学校3年生 約80名、見学者(大人) 約30名

授業は和田中学校の視聴覚室で、2コマ連続(90分)で行われた。本時のテーマは「ホームレス問題を考える」で、見学者は‘参観’ではなく‘参加’して、生徒と一緒に議論を交わす。

【授業展開(よのなか科ワークシートより)】

- ①「ホームレス」のイメージを考えよう
- ②「ホームレス」にかかわる事件例を読んでみよう。
- ③ホームレスになっている原因を探ろう。
- ④ホームレスを減らすための解決策を考えよう。(グループワーク)
- ⑤ゲスト講演
- ⑥まとめ

①「ホームレス」のイメージを考えよう。

ホームレスに対するイメージをワークシートに記入する活動。時間は3分で、10個以上の要素を挙げられるように指示。記入後、藤原先生が生徒を指名して、自分が書いたイメージを発表させた。

²⁷ 東京都杉並区立和田中学校 HP <http://wadajh.sakura.ne.jp/>
藤原和博『公立校の逆襲 いい学校をつくる!』朝日新聞社、2004年

【生徒の発言】

- ・家がない ・食べるものがない ・公園で暮らしている ・ダンボールハウス
- ・家族がいない ・新聞紙 ・駅によくいる

普通、学校長は生徒の名前などほとんど覚えていないのだが、藤原先生は生徒一人ひとりの名前と顔を覚えており、テンポよく指名をする。生徒が発言すれば、必ず拍手をして、生徒が発言しやすい環境作りをしていた。

②「ホームレス」に関わる事件例を読んでみよう。

ホームレスの男性2人が、若い男に暴行を受け、1人は死亡、1人は重傷を負ったという事件記事を取り上げ、これを読んだ感想に近いものを以下からA～Dの中から選ばせた。

- A. 若い男たちの行動は、絶対に許せない。
- B. 若い男たちの行動は悪いが、気持ちはわからないでもない。
- C. ホームレスの人たちはやられてもしかたがない。
- D. 自分もホームレスの人たちを襲撃したい。

Aを選んだものが9割以上いて、Bが1割ほどいたが、1人だけCを選択した生徒がおり、藤原先生はその生徒になぜCを選んだのか理由を聞いた。

【生徒の発言】

ホームレスは公園や駅にいて、通行の邪魔になったり、臭かったりと周囲を不快にするので、やられても仕方がないと思った。

筆者が驚いたのは、理由を聞かれた生徒は戸惑うことなく、堂々と自分の意見を大勢の前で発表していたことだ。藤原先生は発言した生徒に対して、「よく、勇気を持って手を挙げてくれた。少数者の意見に本質が隠されていることが多いので、必ず少数者の意見に耳を傾けなければいけない」と声をかけており、発言した生徒に対して全員で拍手を送った。

③ホームレスになっている原因を探ろう。

次にホームレスになっている原因を3分間で考える。藤原先生は考える時間を設けるときに、「3分間で最低5つは挙げてみて」と必ず、具体的な時間と数字を言う。このように指示が明確であると、生徒は3分という短い時間でも一生懸命考えることができる。

【生徒の意見】

- ・ リストラにあつて、生活できない・一回失業してしまうと、元に戻れないから
- ・ 仕事場が少ない・1度ホームレスになると住所がないので、就職活動ができない
- ・ 保護者がいない・家族がいない・駅や公園にいて、皆に注目されたい
- ・ 借金から逃げる・家族に追い出される・若いときに就職できなかった
- ・ 中年になるとなかなか就職できない・犯罪者だったから雇ってもらえない
- ・ 死にたくはないが、一生懸命働いてまで生きたくはないから
- ・ 周りの人や会社の評価から自由になりたい

藤原先生が生徒の気になる発言に対して、「なんでそう考えたの?」「もう少し説明して」とさらに発言を促すと、生徒は堂々と自分の考えや理由を述べる。どんな意見が出ても藤原先生は絶対に生徒の意見を否定しない。これはよのなか科を始めたときから、先生がずっと言っていることで、生徒に対しても「相手の意見を否定しないように」と指導している。筆者が生徒の意見を聞いて驚いたのは、生徒の社会にアンテナを張り巡らしているということだ。生徒の意見を聞く前は、「愈げたいから」「自由になりたいから」という理由ばかりで占められるのでは思っていたが、ニュースや社会問題を常日頃から気に掛けているからこそできる発言がとても目立った。例えば、中途採用の難しさや、住所がないためなかなか就職ができない、などとても中学生の発言とは思えない。また、ネガティブな理由ばかりではなく、「周りの人や会社の評価から自由になりたい」という、ポジティブな考え方もできており、視野がとても広い。

④ ホームレスを減らすための解決策を考えよう。(グループワーク)

生徒6人、大人2人でグループを作り、ホームレスを減らすための解決策を考える。ここでは、現実的に可能な解決策を上げるというよりも、中学生の柔軟さを生かした解決策を考えるように指導。グループワークは全部で15分。まず、最初にホームレスになってしまった原因の中で、優先順位をつけ、グループのなかで最も重要だと考える原因を選ぶ。次に、その原因を解決する策を一人ひとりあげる。このとき、一人ひとりに5～6枚の付箋を配り、その付箋に自分アイデアを書き込み、グループのまとめ役となる生徒がA4の用紙に貼り付け、グルーピングしていく。付箋にアイデアを書く作業は3分間と短かったが、30個近くのアイディアが出た。そしてその中で、最も有効だと思うアイデアを選び、黒板に書く。黒板の書き方もカラーチョークを使ったり、イラストを使ったりと、自分たちの考えを自由に表現していた。中には、アイデアの書かれた付箋を花のように黒板に貼り付けたグループもあった。最後に、グループの代表者がプレゼンテーションをするが、藤原先生が気になる意見には説明を求めて、議論を発展させていた。以下は、各グループで上がった意見である。

【各グループの意見】

- ・ホームレス保険 ……少しずつお金を積み立てて、ホームレスになってしまったら支給される。
- ・ホームレスのホーム……ホームレスに家を与えると共に、共同生活をして心の拠り所をつくる。
- ・ホームレス憲法 ……1条、全員自衛隊に入れて、人手不足を解消させる。
2条、強制的にドナー登録させる
- ・ホームレス農家計画……日本の食料自給率が低く、農家人口が少ないため、農家にホームレスを派遣して農業をさせる。
- ・ホームレス検定 ……再就職し易いように、ホームレスが資格を取得するときは、受講料や受験料を国が負担する。
- ・伝統工芸をやらせる……後継者不足の伝統工芸の技術をホームレスに教える。
- ・ホームレス体験 ……中学生とときにホームレスを体験することで、生活の大変さを知り、将来ホームレスになる人を少なくする。
- ・住み込みの職場の斡旋……工場勤務や大工など住み込みで働ける場所と提供する。
- ・「ホームレス男」 ……「ホームレス男」という映画を作り、ヒットさせ、その利益をホームレスに寄付する。
- ・リストラ税を導入する リストラをした場合、会社にリストラ税を払わせる。
- ・ホームレスに起業のノウハウを教え、自分で会社を起こさせる。
- ・ホームレスを過疎地に連れて行って、地域に貢献させる
- ・ダンボールアート

以前、学内討論会のためにゼミ生でホームレスの調査をし、解決案を話し合った際には全く出てこなかった案ばかりが出てきた。中学生の思考の柔軟さにはとても驚かされる。どんな意見であろうと先生は「なるほど」「おもしろい」と生徒の意見を尊重していた。生徒もプレゼンテーションを楽しんでいた。

⑤ゲスト講演

ホームレスと一緒にボランティア活動をしている男性と、元ホームレスの男性、をゲストに招き、体験談を講演した。

一人目のゲストはホームレスと一緒にボランティア活動をしている男性。「^{ごみゼロ}530部隊」を結成し、6年間に渡って150人のホームレスと週3回、朝6時から2時間、新宿の清掃をし、現在は、ホームレスと佐渡に行き、そこで米づくりをするという活動を行っているという話をした。

二人目のゲストは、元ホームレスの男性。自分が一番大切で、人生の分岐点で一番楽な

道ばかりを選んできた結果、ホームレスになってしまったので、自分のことを最後に考え、楽でない道を選ぶことでホームレスを脱却した。しかし、ホームレス生活は、人とのつながりの大切さ、助け合いの精神、コミュニケーションの重要性、を知ることができ、家はなくても心のホームレスにはならなかったと語った。

約20分の講演だったが、生徒は真剣にゲストの話聞いていた。テキストにある文章よりも、実際に体験した人の話は生徒の心を惹きつける。よのなか科では毎回ゲストを招き、生の話を聞かせることで生徒により刺激を与えている。

⑥まとめ

「ホームレスと聞くと、パターン認識してしまう。しかし、ホームレスと呼ばれる人たちは、様々なことを経験した1人の人間であり、彼らは「ホームレス」ではなく一人の〇〇という名前の人間なんだということを知らなければならない」と藤原先生はまとめた。

□反省会□

90分(45分×2コマ)という短い時間だったが、とても密度の濃い時間であった。授業の後に、大人のみで反省会が行われた。ここでは藤原先生が和田中学校の指導方針とさまざまな活動について語った。

和田中学校は偏差値35～75まで幅広い学力の生徒がおり、中には複雑な家庭環境で育った生徒もいる。学力レベルは東京都の平均とほぼ同じで、とりわけ突出しているわけではない。学校は、学力の高い生徒を育成しようとしているわけではなく、賢い生徒の育成を目指しているという。よのなか科のテストは、一般論を求めるのではなく、設問に対して3行ほどの文章を書かせ、そこでの論理的思考を見る。そのため、正解はひとつではない。また、週に1回7限を設け、全教員が作文指導にあたっている。例えば、「父がガンになりました。あなたは告知しますか？」というような設問に対して、原稿用紙一杯に書く練習をしている。単なる暗記の情報処理能力よりも論理的思考力を重視している。

和田中学校ではよのなか科のほかにも、「夜の塾」(通称:夜スペ)を開講し、学校の授業だけでは物足りない生徒がプラスαで学べるようなカリキュラムもある。また、土曜日には「土曜テラコヤ」(通称:ドテラ)を開き、学校の授業についていけない生徒や、部活に所属していない生徒に学校を開放し、生徒の興味・関心を伸ばしている。これらの活動には将来教師を目指す大学生や、定年退職した人、地域の住民、など様々な人がボランティアとして参加している。先生以外の大人と関わることで、生徒は教師に言えない相談をすることができ、たくさんの人を巻き込むことで学校を中心に地域をよみがえらせる、と

いう思惑があり始めた、藤原先生は話した。また、よのなか科を始めて4年が経つが、同じテーマで同じように授業をしても、生徒の反応や思考は毎年進化しているという。これを先生は「学校効果」と呼んだが、学校の中でインテリジェンスが伝染し、いつかは世の中へも伝染すると考え、学校教育の重要性を語った。

第三節 他の公立校へ活かせる要素

本節では、緒川小学校と和田中学校の取り組みから、その他の公立校へ活かせる要素を述べる。

(1) 学習速度・到達度・興味関心、に応じた授業

学習速度・到達度・興味関心、に応じて授業を行うことは、授業についていけない子どもを生みださず、生徒の興味・関心を惹きつけて伸ばすことができるので、非常に重要な要素である。一人ひとりの学習速度に合わせ指導することができるならば、授業内容を理解することができ、授業に集中できる。到達度に応じて、基礎部分を何度も繰り返して復習するなど到達度を上げていくことで、子どもは「分かる」楽しさを感じることになる。また、教師が一方的に教材を与え、興味がなかりと調査しなければならないことよりも、生徒が興味・関心があるテーマを自身で選び、調べていく方が、生徒の自主性や創造性、決断力など様々な力を育成でき、生徒も調べるのが楽しく思えるだろう。

(2) 個別指導、T Tによるサポートの徹底

学習速度・到達度・興味関心に応じた授業を行うためには、個別指導、T Tによるサポートの徹底が必要不可欠である。公立校では、生徒の学力格差が私学に比べ大きいので、一斉授業ではどうしても理解不足の生徒が出てきてしまう。そこで、教師が個別で生徒の勉強を見てあげることで、授業で理解できなかった箇所を理解させることができ、生徒は一斉授業ではできなかった質問をすることができる。さらに、生徒とコミュニケーションをとる機会が増えるため、生徒や学級の異変に気付くことができる。また、T Tで対応すると一斉授業を進めながら、同時に理解不足の生徒をフォローできるという利点があり、自分が担当するクラスを越え、学年を越えて、自分の学校にはどんな生徒がいるのかが分かり、教員のモチベーションが上がり、一体感が生まれてくる。

(3) 地域住民・ボランティア・保護者の協力

公立校は教師の人数が自治体によって決められており、私学のように自由裁量で教師を

雇うことができない。しかし、個別指導やT Tを行うとなると、教員の負担が今以上に増えてしまう。そこで、地域住民・ボランティア・保護者の協力が必要となる。地域住民や大学生ボランティアに補習をしてもらうことで、生徒はしっかり学習でき、教師は校務に使える時間が増える。大学生やお年寄り、職人、など教師以外のたくさんの大人・たくさんの職種の人と接することは、生徒の視野を広げることにつながる。また、保護者に学校の教育方針を理解してもらうことで、積極的に学校行事に関わりを持ち、学校と家庭の両方で子どもを育てていくことができる。

(4) 自治体の理解と協力

和田中学校がある杉並区は今までも独自の政策を行っており、話題になってきた²⁸。和田中学校のような取り組みは、保守的な自治体ではできなかった可能性もある。杉並区教育委員会では『人が育ち、人が活きる杉並区』として地域の核となる学校づくりを推進している²⁹。そのため、教員の独自育成や独自採用、権限委譲により校長がリーダーシップを発揮し、それぞれの学校が独自の学校経営を行えるようにしている。学校で様々な取り組みをするためには、自治体の協力と理解も必要となっている。

²⁸ レジ袋税条例の制定 (2002)。住宅地を巡回する安全パトロール隊の発足 (2003)。産業経済課アニメ係を区役所に設置 (2006)。

²⁹ 杉並区教育委員会 HP <http://www.kyouiku.city.suginami.tokyo.jp/index.asp>

第五章 誰もが通える学校のかたちとは

第3章、第4章、でフリースクールとオープン教育から公立校へ活かせる要素を取り上げた。これをもとに誰もが通える学校とはどういうものか、について本章で述べていく。

第一節 個を育てる教育プログラム

(1) 子どもの個性を認めた教育

公立校では、学級崩壊やいじめ、登校拒否、不登校、などの問題を抱えている。原因は様々あるが、このような状況にある子どもは共通して学校での居場所を失っている。学級崩壊によってまともに授業を受けられない、こんなクラスには入れられない、学校に行けばいじめられる、落ちこぼれのレッテルを張られる。居場所がない学校に通うのは苦痛である。学校が居心地の良い場所となるためには、生徒を認めることから始めなければならない。「勉強」が苦手な生徒も、「独創性」や「感性」が優れているのかもしれない。教師とは異なる生徒独特の考え方があるのかもしれない。つまり、フリースクールの教育理念のように、生徒一人ひとりの個性を認めて、「勉強が全てだ」という価値観に縛られてはいけない。もちろん、マナーや礼儀、人としてやってはいけないことは厳しく指導することは必要だが、一方的に教師の考え方や価値観を押し付けてはいけない。学校・教師は企業に雇われるための情報処理型の人間ではなく、きちんと物事を考えられ、疑問を持ち、自分で問題を解決できるような人間に育てていくことが重要なのだ。生徒一人ひとりの個性を認め、その個性を伸ばすような教育を施すことで、生徒は自分の存在価値というものを理解し、学校に居場所を見出すことができる。

(2) 子どもの理解度に合わせた教育

公立校は学力の差が大きい。そこで、個別指導やTTの授業を導入し、学習速度、到達度、に応じた授業を行うことが挙げられる。補習という形で個別指導を受けることができるならば、子どもの理解度に的確に反応していけるので、高い水準を求める生徒には高いものを、基礎を求める生徒には基礎を教えることで、授業についていけず学校に通うことができない生徒を生み出すことがなくなる。生徒にとっても、教師と会話する時間が増えるので、悩みを相談しやすくなるという利点があり、生徒が追いつめられる前に救いの手

を差し伸べることができるであろう。また、一斉授業でTTを導入することで、授業を進めながら理解不足の生徒をフォローすることができる。さらに、教師と生徒、教師と教師の関係も密になり、生徒一人ひとりに複数の教師の目が向くため、生徒理解を深めることに繋がる。

(3) 興味関心を伸ばし、思考することを植え付ける教育

受験のためだけの暗記の授業は実に退屈でつまらない。教師から出された課題をただやるだけでは面白くないし、思考力も育たない。そこで、緒川小学校のオープンタイムのように、主体性を子どもにおいて自由な研究をすることで、「思考」する面白さを味わうことができる時間を設けることが必要だ³⁰。普段の授業の時も、なぜこの答になるのか、なぜこのできごとが起こったかなど、「なぜ」を考えさせる授業展開になるよう工夫を施したり、理科の実験でも、この結果を得るためにはどういう実験器具を使い、どんな物質を使えばいいのか問いを投げかけたり、と生徒が思考する時間を増やすようにする。また、生徒が興味ある分野・内容について好きに研究したり、活動したりする時間があると、子どもの興味関心をさらに深めることができる。授業で思考する面白さを経験できれば、関心あるテーマの研究はきっと楽しいものになるだろう。すると、学校が退屈でつまらない場所だと思ふことはなくなるのではなかろうか。

第二節 開かれた学校

(1) 地域住民・ボランティアとの協力

東京シューレにしても、緒川小学校にしても、活気のある教育現場は地域と関わりがあり、ボランティアが活躍している。学校だけで教育をするのではなく、地域・ボランティアをも巻き込んだ学校であることが重要だ。地域住民や大学生ボランティアに補習をしてもらうことで、生徒はしっかり学習でき、教師は教材研究や校務に使える時間が増える。また、和田中学校のように授業にゲストを招いたり、講演会開いたりすることで、真実味に溢れ、教科書よりももっと深く知ることができる。大学生やお年寄り、職人、など教師

³⁰ 小・中学校においては平成14年度より、高等学校においては平成15年度より「総合的な学習の時間」が実施されている。子どもたちに自ら学び自ら考える力や学び方やものの考え方などを身に付けさせ、よりよく問題を解決する資質や能力などを育むことをねらいとしている。しかし、実際はどんな授業をすれば良いかが分からず、持て余している学校が多い。

以外の大人と生徒が関わることで、生徒の知的好奇心を刺激し、学校に新鮮な風を吹き込んでくれる。

(2) 保護者との協力

公立校も私立校のように、保護者にきちんと教育方針・教育方法を説明し、理解させ、保護者が協力的な学校であることが求められる。緒川小学校のように、始めは生徒の目線でどのような学校生活が送られているのか見学することから始め、学校の学習活動に協力し、最後には学校を社会へ宣伝する役割を担っていけると良い。教育を行うのは学校だけではない。保護者も学校に協力して一緒に子どもを育てていくことが必要となり、保護者と協力体制ができていなければならない。

(3) 自治体との協力

公立校であるということは、自治体の許可がないと、新しいことを導入するにも実現できない。つまり、学校は自治体の理解・協力が必須となる。地域の核となる学校づくりを推進している杉並区は、それぞれの学校が独自の学校経営を行えるようにしており、和田中学校は其中で様々な教育プログラムを導入している。理解ある自治体に支えられてはじめて学校は独自の取り組みをすることができる。

終章

学校は人格を形成する大切な時期に通う場所であり、ここで様々なことを学び、人は成長していく。学校は子どもにとって安心して成長していける場所であればならない。そのためには、現在ある学校の多くは変革を必要とする。個を育てる教育プログラムを実施している公立校は本当に少ない。子どもたちが自分の興味関心を潰してしまわないように、伸び伸びと育てることは非常に重要である。自分が何に興味関心を持ち、これだけは人に負けないというものを伸ばすことは、その子の自信に繋がる。そして、その過程で、思考し、判断する力を十分養うべきだ。管理された環境から抜け出し、大学に入り、社会人になると、指示をくれる人などいない。自分で考え、判断し、決定していく力がなければ自己実現などできない。学校は思考力・判断力・決定力・行動力、など一人前の大人として生きる力を育てる場所である。

また、学校・教師のみが教育を施すのではなく、地域・保護者・自治体が一丸となって教育に取り組むことが重要である。教員は忙しく、生徒一人ひとりを見ることができない。そこで、地域ボランティア、学生ボランティア、保護者の協力は必要不可欠な要素で、そういった協力をいつでも得られるような学校でなければならない。

ルソーは「生まれたときにわたしたちがもってなかったもので、大人になって必要となるものは、すべて教育によってあたえられる³¹。」と述べていた。教育はすべての子どもに与えられるべきものである。しかし、現在、学校では様々な問題を抱え、受けられるはずの教育を受けることができずにいる子どもがいる。筆者は、そういった子どもたちが一人でも少なくなるよう、学校が変わることを祈っている。

³¹ ルソー、前掲書、p 24

参考・引用文献

- 馬場章『行ってみないかこんな「学校」』ハート出版、2000年
高橋哲夫・小篠弘志『公立学校がなくなる』情報センター出版局、2001年
武藤浩司『フリースクールの授業』社会評論社、2004年
天井勝海『夢・挑戦・感動ある「楽校」』学事出版、2003年
増田マツヤ『「新」学校百景』オクムラ書店、1999年
藤原和博『公教育の未来』ベネッセコーポレーション、2003年
『公立校の逆襲 いい学校をつくる!』朝日新聞社、2004年
小笠原和彦『学校はパラダイス 愛知県・緒川小学校オープン教育の実践』現代書館、2000年
灰谷健次郎『天の瞳 成長編Ⅱ』角川出版、2001年
ルソー『エミール（上）』岩波書店、1962年
文部科学省 <http://www.mext.go.jp/>
「学校基本調査」
「児童生徒のいじめ等に関するアンケート調査結果」
「登校拒否児童生徒に関する調査」
教育家庭新聞 2007年4月18日 http://www.kknews.co.jp/wb/archives/2007/04/1_2.html
日経新聞 1998年10月23日
<http://www.senior-rrilic.net/homepage1stversion/no.4life/no.4-4fmly/fmly009.html>
『Fonte.』（旧『不登校新聞』）2007年8月10日 <http://www.futoko.org/top/news/070810.html>
郡司『「公立小中学校はこのままでいいのか」『これでよいのか日本』
<http://www.ne.jp/asahi/osaka/korishou/index.htm>
真中行造「学級崩壊」『つくる会』 <http://www8.ocn.ne.jp/~senden97/index.html>
伊藤志野『フリースクールの現在 教育のオルタナティブ』
<http://www.arsvi.com/0b/96022915.htm>
明田直哉・大田真理子・昆卓也『現代教育改革の在り方～現状とこれから～』
<http://gyosei.mine.utsunomiya-u.ac.jp/070702ensyukyoiku.htm>
東京シューレ HP <http://www.homeshure.jp/>
緒川小学校 HP <http://www.medias.ne.jp/~hogashot/>
東京都杉並区立和田中学校 HP <http://wadajh.sakura.ne.jp/>
楠の木学園 HP <http://home.netyou.jp/gg/kusunoki/>
ヒューマン・ハーバーHP <http://www.human-harbor.co.jp/>
フリースクール・ぱいでいあ HP <http://freeschool-paidia.hp.infoseek.co.jp/>
フリースクール僕んち HP <http://www.aa.alpha-net.ne.jp/bokunch1/page1.htm>
人の泉・オープンスペース HP <http://www.be-here.gr.jp/>
相模湖フリースクール HP <http://www.f91m77.niknak.ne.jp/>
スペース海 HP <http://www.space-umi.org/>